



説教要旨 「折が良くても悪くても」

テモテへの手紙Ⅱ 4章1～8節

今日のキリスト教の礎を築いた使徒パウロには、幾人かの協力者がいました。この手紙の宛名にあるテモテは、パウロの弟子であり、パウロが大きな信頼を寄せていた協力者でもありました。テモテはパウロの第二回宣教旅行、第三回宣教旅行に同行するほか、パウロがすでに宣教活動を行った場所に派遣されて、指導に当たってもいます。

そのようにパウロの良き協力者であるテモテへと宛てられた、この手紙の目的ですが、「ぜひ、急いでわたしのところへ来てください。」(4章9節)と言っています。更に「冬になる前にぜひ来てください。」(4章21節)とも、繰り返して願っています。この時、パウロは牢屋に囚われていて、自らがテモテに会いに行くことは出来ない状況にありました。「わたし自身は、既にいけにえとして献げられています。世を去る時が近づきました。」(4章6節)と言っているように、パウロには死の時が迫っていたのです。

使徒パウロがどのような最期を遂げたのか、聖書はそれを記していませんし、それを知る術を私たちは持っていません。ただ、このテモテへの第二の手紙には、死の前に親しい友、テモテに会いたいと願う、パウロの人間くささが表れているのではないのでしょうか。

クリスマスの喜びは、困難な状況かかえ、深い闇の中を歩んでいるからこそ、より大きなものとなります。私たちもそれぞれに困難や不安を抱えているのではないのでしょうか。けれども、だからこそ私たちは心から「救い主よ、来てください」と願うことができるのです。そして深い闇に囚われて、自分から主のもとに行くことができない私たちのもとへ、神の独り子、救い主イエス・キリストはおいでくださったのです。

救い主を待ち望む、このアドベントの時、「主よ、来てください」と願いつつ、それと同時に、暗い闇の中で救いを待ち望む人々に、光の到来を、救い主の誕生を告げ知らせるため、神様が私たちを用いて下さるよう共に祈りましょう。